2021/04/18　七里教会　　最上 光宏

「キリストの招き」　　マタイ福音書 11:28

今日は、この礼拝の後、新年度の定期教会総会がもたれます。七里教会では、昨年度、教会の「標語」として、先ほど司会者によって読んでいただいたマタイによる福音書 11 章 28~30 節のみ言葉が掲げられ、一年間の歩みがなされました。

新年度の教会の「標語」について役員会で協議した結果、昨年度の標語をもう一年継続してはどうか、ということになりました。これは、私から提案したことでもありますが、この無牧の期間、出来るだけこれまで前任の小林牧師の下で築かれてきたこの教会の歩みを継承して、それをこれからお招きする新しい牧師に受け継いでもらうことが大切である、と思ったからです。そのような意味で、今日は、総会で提案する新年度の「標語」のみ言葉「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」というみ言葉について、改めて、ご一緒に学びたいと思います。

このみ言葉は、この講壇の脇にも掲げられていますが、多くの教会の案内や掲示板等にも掲げられている、大変よく知られているみ言葉です。このみ言葉で思い出すのは、私が金沢の教会にいたころのことです。その教会の掲示板にも、このみ言葉を掲げていました。前の口語訳で「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と。ある日のこと、私が、奥の牧師館から、礼拝堂に来てみると、近くで道路工事をしていた作業員の人たち 7,8 人が、会堂のロビーに上がり込んで、お弁当を広げて賑やかに食べたりしゃべったりしているのです。中には横になってくつろいで人もいてびっくりしました。顔を出しますと「お邪魔しています!」と挨拶するのです。聞いてみると、「表の看板に、『すべて重荷を負うて苦労している者は、来なさい。休ませてあげよう』と書いてありましたので、お言葉に甘えて、休ませて貰っています」と言うのです。結局、「どうぞごゆっくり」と言って、お茶まで出してあげたことがありました。イエスさまが招いてくださったのだ、とおもったからです。

このみ言葉は、主イエス・キリストの「招きの言葉」として、礼拝や聖餐式でよく読まれるみ言葉です。原文では、「来なさい、私に、みんな」こういう語順で記されているのです。英語では「Come to me,all…」となっています。まず「来なさい」という招きの言葉があって、「わたしに」、「すべて」という言葉が続くのです。みんながイエスさまに招かれているのです。

ドイツの牧師で、ヒットラーに抵抗して、39 歳の若さで殉教したボンヘッファーは、この箇所の説教の冒頭でこのように語っています。「イエスがこの聖書の言葉を語られたからには、誰も自分に対して『私に声をかけてくれる人は一人もいない』、『誰も私を助けてくれない』などと言うことは出来ない。そして自分がまるで見捨てられたかのように考える人など、この地上にいてはならない。…それは、イエスが、苦労している者や重荷を負っている者すべてに対して、呼びかけているからである」と。

イエスさまは、人を偏り見ることをいたしません。人を人種や性別、外見や才能や能力、その他いかなる条件によっても、人を分け隔てなさいません。それがこの「すべて」「だれでも」という言葉の意味です。私たちは、だれでも、皆、イエスさまに招かれて

ここに集められているのです。イエスさまが私たちを招かれたのは、私たちに特別に取り柄があるからではありません。むしろ、弱く、様々な重荷を負って苦労し、生きることに疲れを覚えているからからです。

パウロは、コリントの信徒の手紙(1)の中で「兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを考えてみなさい。人間的に見て、知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄の良い者が多かったわけでもありません。ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。」(1:26-28)と述べています。これが教会なのです。

教会は、神さまによって「召された者の集まり」です。弱く小さな「土の器」ですが、みんなイエス様によって必要とされて、「私のもとに来なさい」と声を掛けられ、呼び集められた群れなのです。ですからパウロは、教会を「キリストの体」と呼び、その一人一人はその体の大切な部分である。ある者は足であり、ある者は手であり、ある者は目、耳、口であるように、みんな違っているけれど、みんな無くてはならない大切な体の部分だ、「体の中で弱く見える部分がかえって必要なのです」と語っているのです(Ⅰコリント 12:12-27)。

イエスさまが、私たちを選んで、招かれたのは、何よりもまず、私たちに「休み」を与えるためでした。「あなた方を休ませてあげよう」と。「休ませる」とは、「魂に安らぎを与える」ことです。復活されたイエスさまは、恐れと不安の中で、家に鍵までかけて閉じ籠っていた弟子たちに現れて、何度も「平和があるように」(シャローム)と言われました。「休ませてあげよう」とは、あの平安、シャロームがあるように、という主イエスの祈りなのです。　教会は、主イエス・キリストとの出会いによって、魂に「休み」(平安が与えられる)場所です。教会は、みんなにとって、疲れが癒され、慰められ、新しい力を与えられる場所でなければなりません。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」この聖句が、昨年度に引き続き、この年度も、私たちの教会の標語として選ばれることには、大きな意味があると私は思っています。私たちは、まず礼拝を通して、しっかりとイエスさまにつながり、イエスさまの与えてくださる「休み」、魂の平安にあずかることを大切にしたいと思います。そのために私たちは、まず、み言葉にしっかり耳を傾け、祈りを通してイエスさまと深く結ばれる必要があります。そして私たちお互いが、キリストの愛によって一つにむすばれ、互い兄弟姉妹として受け入れ合い、祈り合い、支え合って、共に生きることが大切です。パウロは「一つの部分が苦しめば、全ての部分が共に苦しみ、一つの部分が貴ばれれば全ての部分が共に喜ぶのです」(Ⅰコリント 12:26)と言いましたが、そういうキリストある強い絆のなかで、私たちの疲れは癒され、心にやすらぎと平安が与えられるのです。

それにしても、どうして、キリストのもとに、そのような安らぎと平安があるのでしょうか。イエスさまはその理由として、20 節で「わたしは、柔和で謙遜なものだから」と述べています。「柔和」とは、単に「おとなしい」とか、「優しい」と意味ではありません。相手を思いやり、相手の立場に立って共に歩まれる「イエスさまの愛」を示す言葉です。「謙遜」とは、単に「謙虚さ」を示す言葉ではなく、「キリストのへりくだり」

を意味する言葉です。イエスさまは、神の御子であるにもかかわらず、自分を虚しくして、貧しき人となり、十字架の死に至るまで、私たちに仕えてくださったのです。このキリストの愛とへりくだりこそが、私たちに魂の安らぎと平和を与えるのです。

イエスさまは、このように「わたしは柔和で、謙遜な者」と語られた後、「だから、わたしの軛(くびき)を負い、わたしに学びなさい」と、語られました。「軛(くびき)とは、牛やロバなどの首にかけて、鋤(すき)や荷車などを引かせるための木製の道具です。大抵、横に並べた 2 頭の家畜の首にこれをかけて荷車などを引かせたのですが、イエスさまは、その軛の片方に首を入れて重い荷物を運んでいるという設定です。そこでイエスさまは、招いた人に向かって、「さあ、あなたもこの軛のもう一方の軛に首を入れて、わたしと一緒に歩きましょう」と招いているのです。

イエスさまの負っている荷物は、私たち人間の悩みや苦しみです。イエスさまは、その荷物を一緒に負いましょう!　と言われるのです。これはどういうことでしょうか？

これは一見、矛盾しているように思われるかも知れません。最初の招きでは、「休ませてあげよう」と言いながら、今度は、「わたしの軛を負って従いなさい」というのです。「話が違うではないか。『休ませてあげよう』と言ったのに、それでは休みにならないではないか」、と思う方もいるかもしれません。　実は、ここに、イエスさまの招きの深さがあるのです。イエスさまに招かれて休みを与えられるということは、単に重荷から解放されて、安心して、何もしないという安らぎではないのです。イエスさまによって救われ、解放された喜びは、そこで満足して留まってしまうものではなくて、イエスさまの愛に感謝して、喜んでイエスさまに従い、イエスさまの担われた重荷を、イエスさまと共に担っていこうという、積極的な生き方へと私たちを押し出すのです。

自分の負うべき十字架を負ってイエスさまに従うこと。そのことによって、私たちはますますイエスさまの十字架の苦しみに触れ、イエスさまの深い愛と恵みにあずかり、本当の安らぎ、より深い平安にあずかるのです。イエスさまは、他の箇所で、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」(マタイ 16:24)と言われました。イエスさまの招きは、十字架を負って主に従うことであり、主に従うことの中に、本当の安らぎと平安を与えられるのです。

イエスさまは、「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と語られたあと、「そうすれば、あなた方は安らぎを得られる」と語られ、「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(30 節)と言われました。これはイエスさまの担われた十字架の重荷が軽いという意味では決してありません。イエスさまがご自分の担っておられる軛によって、ほとんどの重荷が担われているのです。ですから、もう片方の軛に掛かる重量は軽く、負いやすいのです。これは、十字架を負ってイエスさまに従うということが、どんなに大きな恵みであり喜びであるか、ということを言い表した言葉なのです。

「わたしに学びなさい」。「学ぶ」とは「まねぶ」=「まねる」から来た言葉で「従う」という意味です。イエス・キリストによる救いは、ただ悩みや苦しみから解放されて、心に安らぎと平安を得る、ということに留まるものではありません。その安らぎと平安の中で、さらにもう一歩、主の恵みに応えて、主に従って、主イエスと共に歩むことです。私たちはそのことによって、十字架と復活の主とさらに深く結ばれるのです。

七里教会にとって、無牧になったことは、心細いことであり、色々と不都合なこと、困難を覚えることも多いと思いますが、教会にとって無牧を経験することは、決してマイナスのことばかりではなく、プラスの面もあるのです。それは信徒一人一人が自立して、教会の担い手として成長するチャンスでもあるからです。教会は、本来、牧師が中心ではなく、信徒が中心になって、牧師と共に形成され、成長していくべきものです。色々と大変でしょうが、信徒一人一人が自覚をもって、それぞれの賜物にお応じて役割を分担し、重荷を担い合って、この地域、この世に対する宣教と奉仕の業を推し進めていく必要があります。それぞれが分に応じた十字架を担うことによって、私たちは、さらに深くキリストと結ばれ、主の祝福と平安にあずかることが出来るのです。

今、長引くコロナ禍の中でみんなが、疲れを覚え、様々な重荷を抱えている時です。イエスさまは、そのような重荷を抱え、疲れを覚えているすべての人々に「私のもとに来なさい」と招いておられます。先にその招きにあずかり、平安を与えられた私たちは、その恵みに応えて、一人でも多くの人々が、その招きに気づき、まことの安らぎと平安にあずかることが出来るように祈り、証しし、宣べ伝えて行く必要があるのです。この新しい年度、みんなで主の軛を負って、共に主に従ってまいりたいと願います。